様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３１５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１３５６５

研究課題名（和文）妖怪文化を活用した教科横断型の地域学習支援ツールの開発

研究課題名（英文）A Development of Cross-Curricular Local Learning Tool Using Yokai Culture

研究代表者
市川　寛也（Ichikawa, Hiroya）

東北芸術工科大学・芸術学部・講師

研究者番号：６０７４４６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、妖怪文化を地域学習に組み込むために3つの側面に着目した。第一に地域固有の物語としての側面、第二に地域の歴史や地理に根差した郷土資料としての側面、第三に人々の想像力を具現化した存在としての側面である。これらを国語科教育、社会科教育、芸術科教育と関連づけた上で、それらを統合する教育方法の開発を行った。具体的な方法として、まちを歩きながら妖怪がいそうな場所を探し出し、その場所をめぐる物語を想像する「妖怪採集」というワークショップを実施した。研究期間中には、小学生から大人までを対象にプロジェクトを行い、そこでの成果を公開するためのプラットフォームとして「妖怪採集データベース」を構築した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to integrate Japanese "yokai" (Japanese monstrous beings) culture into community-based learning focusing on three aspects. The first is indigenous folkore, the second is historical/geographical documents, and the third is imaginary beings. These aspects are associated with Japanese language education, social education and art education. To configure cross-curriculum learning, the author designed a participatory workshop called "Yokai Collecting." This program involved walking aroud town and trying to imagine the hidden story of the place where the participants feel that a "yokai" might exist. Throughout the period of this research, the author carried out programs designed for elementary school students to adults, and constructed a "Yokai Collection Database" as a platform to make the results available to the public.

研究分野：芸術科教育

キーワード：妖怪文化　地域学習　ワークショップ　データベース　まち歩き　観察力　想像力

１．研究開始当初の背景

１）学際的なテーマとしての妖怪文化研究

今日では、民俗学や文学、地理学といった学問領域を超えて、学際的な視点に立った妖怪研究が進められている。国際日本文化研究センターの小松和彦は、「日本における怪異・怪談及び妖怪文化に関する総合的研究」（平成 11～13 年度、基盤（A）課題番号：11301010)、「怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究」（平成 15～18 年度、基盤（A）課題番号：15202026）を通して妖怪研究の基盤を構築してきた。これらの成果を受けて公開された「怪異・妖怪伝承データベース」では、35,000 件を超える伝承について呼称や地域の別により検索できる。これは、地域学習の素材としても重要なツールとなり得る。

２）地域学習の素材としての妖怪の有効性

また、研究代表者は平成 25 年度以降、東京都荒川区を拠点とする NPO 法人千住すみだ川との協働で《隅田川妖怪絵巻》と題するアートプロジェクトを実践してきた。これは、地域の伝承や個人の記憶を文化資源と見なし、それらを活用することで住民の地域理解を深めることを目的とする活動である。一般参加者を対象とするまち歩きワークショップを通して地域の物語を収集・再創造し、その成果の一部をもとにスマートフォン用のアプリケーション「南千住百物語」を作成した（平成 26 年 4 月公開)。これと並行して、近隣の学校で妖怪をテーマとする総合的な学習を実施する中で、地域学習の動機づけとしての有効性を実感した。

２．研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では教科教育学の立場から妖怪文化を活用した地域学習の内容と方法を検証する。近年の「妖怪ウォッチ」ブームを挙げるまでもなく、妖怪は児童文化の重要な一部分を担ってきた。ただし、それらは大衆文化として消費される対象であるため、本研究では妖怪文化の持つ以下の 3 つの側面に焦点を当てることにした。

第一に口承文芸として受け継がれてきた地域の物語としての側面（国語科的アプローチ)、第二に地域の歴史や地理的な特徴に根差した郷土資料としての側面（社会科・生活科的アプローチ)、第三に日常を別の視点から見つめ直し、自由に想像力を働かせていく側面（美術科・図画工作科的アプローチ）である。これらの側面に着目し、教科横断型の地域学習支援ツールを開発し、様々な地域において応用できる学習モデルを形成することを本研究の目的とする。

３．研究の方法

本研究では、（１）地域住民参加型による妖怪伝承データベースの構築、（２）データベースに基づく地域学習支援ツールの開発、（３）それらを活用した教科横断型の教育実践の検証という 3 つの段階を組み合わせることで、妖怪文化を活用した地域学習のモデルを提案する。

従来の社会科を基盤とする地域学習では、郷土の偉人や産業に関する授業実践は数多く試みられてきたが、地域の物語である妖怪文化については必ずしも主たるテーマとしては取り上げられてこなかった。しかし、どのような地域にもその土地固有の物語は存在しており、それらを教材化することは地域学習の幅を広げるためにも一定の効果が認められる。今回の取り組みでは、文献調査とともに聞き取り調査を通して地域の物語を収集する国語科としての実践、物語の背後にある歴史的・地理的な特徴を読み解く社会科（生活科）としての実践、それらを第三者に伝えるためのカードゲームの制作を通した美術科・図画工作科としての実践を連動させながら、教科を横断した地域学習の手法を開発する。

４．研究成果

上記の方法に基づき、本研究では（１）地域住民参加型による妖怪伝承のデータベース（以下、「妖怪採集データベース」と呼ぶ）の構築、（２）データベースと連動させた地域学習支援ツール（「妖怪採集帖」および「妖怪採集ノート」）の開発、（３）それらを活用した教育実践（「妖怪採集」ワークショップ）に取り組んだ。なお、本研究で用いる「妖怪採集」とは、まちを歩きながら妖怪がいそうな場所を探し出し、その場所をめぐる物語を想像するワークショップを指す。詳細については、図書①を参照されたい。以下、実施年度毎に研究成果の概要を記す。

[平成 28 年度]

１）こども美術館におけるプロジェクト「あべの妖怪研究所」を通した実践研究

大阪府大阪市の「こども美術館 スカイミュージアム」の事業の一環として、高校生を対象とするプロジェクトとして「あべの妖怪研究所」を実施した（平成 28 年 7 月 23 日-9 月 11 日)。この活動では、国立民族学博物館における鑑賞プログラムやまち歩き企画を通してオリジナルの妖怪を創作し、その成果をもとに「小さな妖怪展」を開催した（平成 28 年 10 月 2 日-10 日)。会期中には教育関係者を対象に「歩いて、観て、想像する―「妖怪採集」から探る授業づくり」と題したワークショップを行った。このプロジェクトの成果については以下に示す雑誌論文②に掲載している。

２）徳島県三好市における道の駅と連動したプログラム開発

地域住民の主導によって妖怪文化を活用

した地域づくりに取り組んでいる徳島県三好市における実践研究に取り組んだ。平成29年4月から6月にかけてJR四国が実施する観光プログラム「ディスティネーション・キャンペーン」に向けて、道の駅大歩危と連携したプログラムを開発した。この地域での取り組みについては雑誌論文①に掲載している。

３）学習支援ツールの開発

上記二か所でのプロジェクトを通して「妖怪採集」のワークショップを効果的に進めるための学習支援ツール（「妖怪採集帖」「妖怪採集ノート」）を開発した。「妖怪採集帖」には採集方法として「自分の体験・記憶」「聞き取り」「文献」「創作」という4つの項目を設け、多様な学習場面に対応できるようにデザインした。また、中学生以上が使用することを想定した一般対象のもの（B4版）と小学生が使用することを想定した子ども対象のもの（B5版）を作成した。

[平成29年度]

１）学習支援ツールを活用したワークショップの実施

上記の学習支援ツールを活用した教育実践に取り組み、参加者の記入状況の検証を行った。道の駅大歩危と連動した企画では、「妖怪採集 in 大歩危」と銘打って児童対象のワークショップを開催した（平成29年7月23日）。この取り組みは徳島県立池田高等学校探究科の教育実践と連携して行い、妖怪文化による地域活性化を学ぶ場としても活用された。また、岩手県胆沢郡金ケ崎町では、一般の参加者を対象に重要伝統的建造物群保存地区の散策を兼ねたワークショップを開催した（平成29年8月5日）。この地域では毎年8月に地域住民の主導による「幽霊・化け物・妖怪画展」が開催されており、ワークショップの成果もその会場において展示された。なお、金ケ崎町の取り組みについては図書②において考察を行っている。

２）教育効果の検証

研究代表者が所属する東北芸術工科大学においても、美術科および全学対象の授業課題の一環として「妖怪採集」を実施した。学生による「妖怪採集帖」への記入状況とワークシートの記入状況から、周囲の環境に対する観察力と実際の場所から物語を思い描く想像力を育むプログラムとしての有効性が認められた。

３）「妖怪採集データベース」の構築

一連のプロジェクトの成果を蓄積し、公開するためのアーカイブとして、研究協力者の西川洋貴による共同開発のもとに「妖怪採集データベース」（http://妖怪採集.com）を作成した。これは、各地で実施された「妖怪採集」の情報を集約することを目的とするデータベースであり、「妖怪採集帖」の記入項目と対応させてある。現時点では参加者が記入した「妖怪採集帖」をもとに入力権限を持つ研究代表者が入力するという方法を取っている。今後、各実施場所での入力権限を拡張することで参加型のデータベースとして活用していくことを想定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 市川寛也「道の駅を起点とするエコミュージアム的実践を通した伝承空間の再生～四国の秘境・山城大歩危妖怪村の取り組みから」『エコミュージアム研究』21号、2017年、pp.30-39、査読有

② 市川寛也「妖怪の再創造と現代的活用―教材としての可能性に着目して」『美術教育学研究』50号、2018年、pp.57-64、査読有

③ 市川寛也「文化資源学としての妖怪研究の展望」『文化資源学』16号、2018年、pp.82-83、査読無

〔学会発表〕（計1件）

① 市川寛也「怪異を歩くまなざし―「妖怪採集」の取り組みから」、怪異怪談研究会、2016年8月27日、明治大学

〔図書〕（計2件）

① 一柳廣孝（監修）『怪異の時空1 怪異を歩く』（分担執筆：第4章 「「妖怪採集」のすすめ―日常を拡張するまなざしの獲得に向けて」）、青弓社、2016年、pp.89-111

② 小松和彦（編）『進化する妖怪文化研究』（分担執筆：Ⅲ比較妖怪学 「創られる妖怪たち―地域に根差した物語再生への試み」）、せりか書房、2017年、pp.290-306

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://妖怪採集.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
市川寛也（ICHIKAWA, Hiroya）
東北芸術工科大学・芸術学部・講師
研究者番号：60744670

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
西川洋貴（NISHIKAWA, Hirotaka）